

編集後記

ある時突然世界が一変してしまう、阪神・淡路大震災、9.11 アメリカ同時多発テロ、東日本大震災とこの種の感覚に襲われる出来事をこれまで経験してきたが、2020年の新感染症の世界的流行はじわじわといつの間にか私たちの日常を変化させていったように思う。移動と対人接触の制限は、大学での研究と教育に大きな影響を及ぼし、私たち白山人類学研究会の活動も定例研究会をオンライン開催に切り替えるなどの対応を強いられることになった。オンラインでの研究会開催は予想を超えて毎回盛況で、さまざまな地域に散在する研究者が一堂に会する機会を増やすという点で、大変意義ある変化であった。とはいえ、やはり残念なのは、懇親会等のインフォーマルな対話の機会が限られた点である。飲食をともにしながら研究会後に続けられる議論は、他に代えがたい実りを発表者をはじめとする研究会参加者にもたらしてくれるものであったからだ。

本年度はもう一つの変化があった。本研究会はもともと大学や専門を問わず、日本国内外の人類学者から毎回論文を募っているが、本年度は自由投稿論文がとりわけ多く寄せられた。このことには、『白山人類学』が2018年度から電子ジャーナル化したことも関係しているだろう。ただし、本号より『白山人類学』では、査読を初回査読・再査読の二回とし、再査読の「査読結果」を最終判定としたこともあり、掲載のハードルはやや高くなった。こうしたことから今後、

若手研究者には、投稿する前に一度論文を指導教員や研究室の仲間に査読してもらうことを勧めたい。そもそも、『白山人類学』の論文は、関連する研究者に毎回大変丁寧な査読をしてもらっている。こうした数々の対話が積み重なることで、磨きあがった一つの論文が完成することと思う。毎回のことながら、多大な時間を割いて投稿論文に建設的な助言とサポートをくださった査読者の皆さま、そうした査読に真摯に向き合ってください投稿者の皆さまに、感謝の意を表したい。

最後に、長年白山人類学研究会を支えてくださった山本須美子先生に心より御礼を申し上げたい。山本先生には、定年後の新生活を謳歌していただきたい。だが本音を言うと、まだまだご活躍されるに違いない山本先生のご退職は惜しく、ただただ寂しくて仕方がないので、山本先生には、今後も白山人類学研究会をそばで見守り、叱咤激励をいただきたいと強く願っている。

(左地 亮子)

白山人類学編集委員 Board of Editors

ゴロウィナ クセーニヤ

GOLOVINA Ksenia

左地亮子 SACHI Ryoko

寺内大左 TERAUCHI Daisuke

長津一史 NAGATSU Kazufumi

箕曲在弘 MINOO Arihiro

山田香織 YAMADA Kaori

山本須美子* YAMAMOTO Sumiko*

* Chief Editor